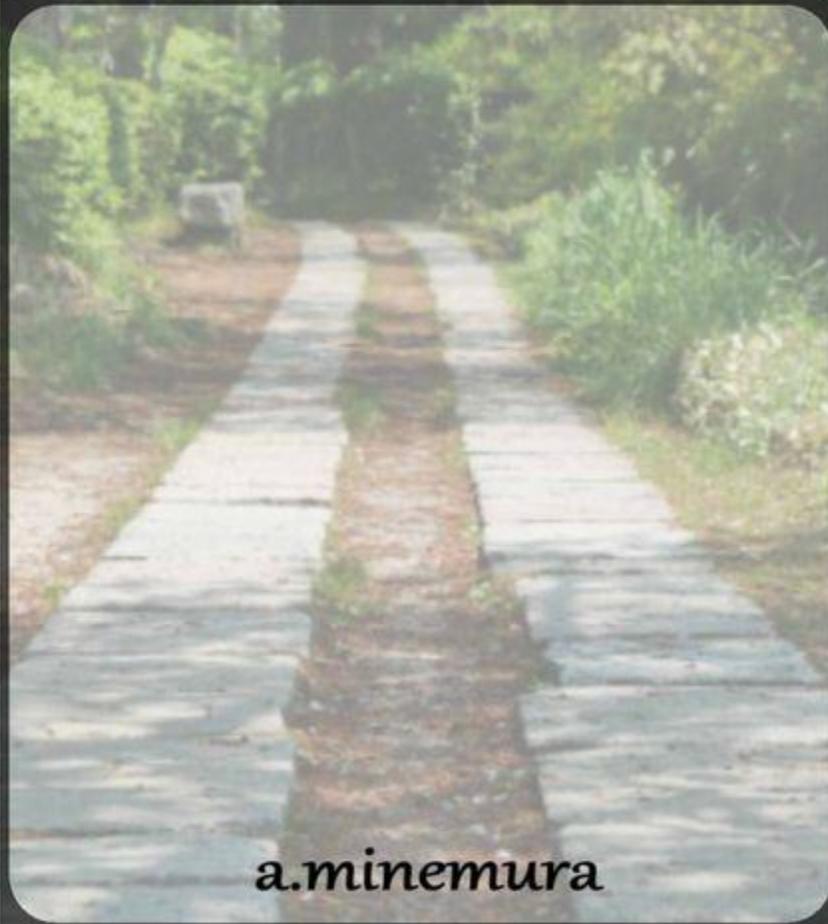


nanako-fifteen



a.minemura

「火の精霊」、「オリカルクムの記憶」から現代につながる短編

目次

登場人物

- 1・その制服で万歳して背伸びするときは
 - 2・あの人、だれ？
 - 3・見えちゃったものはしょうがないだろ
 - 4・誰に何を聞いたのか知らないけど
 - 5・私ที่บ้านまでおぶってさしあげましょう！
 - 6・寒いのは好きなんだ。目がさめるからな！
 - 7・見ちゃったんだ……
 - 8・おまえ、本気か？
 - 9・こんな気持ちは生まれて初めてだよ
 - 10・類は友を呼ぶっていうやつかな
 - 11・ほんの一瞬に見せる気まぐれな美
 - 12・あそこで事故があったらしい
 - 13・生徒会代表してお葬式に
 - 14・これからなのに……
 - 15・中身が、僕は気になるんだけどね
 - 16・清潔で無機的な白い色の下に
- あとがき

登場人物

桧山	健	地方の小さな町の某高校の生徒
桧山	正弘	健の弟。同じ学校の3年生
西ノ宮	奈々子	桧山兄弟と同じ学校の1年生。可憐な美少女
西ノ宮	優美子	奈々子の母
満喜(まき)		奈々子のクラスメート
文枝		〃

nanako-fifteen

1・その制服で万歳して背伸びするときは

夏休み明け三日目の金曜の夕方、Book Off は学校帰りの高校生たちで込み合っていた。

たいていの学生たちはレジ前の安価なゲームソフトを物色するか、コミックスの立ち読みで没頭していて、奥まったこの一角に入ってくる客は少ない。奈々子は書架の前に立って、この間から目をつけていた本に懸命に手をのばした。

(……届かない！ もう、ちょっとなのに……！)

癖のない長い髪を背に流し、左手を棚の枠にかけてつま先立ちし、右手をまっすぐにさし上げ、視線を上に向けているきゃしゃな姿は、まるでバレリーナだ。自分でとるのをあきらめ、店員を呼ぼうと手を引いた時、誰かが横に立った。

「これ……か？」若い声が高いところから聞こえた。

「あ、それじゃなくて。その右のが欲しいの」

ハードカバーの持重りする本が奈々子の手へ渡された。若い声の主がタイトルを目で追っている気配がある。

「……パパのおつかい？」

奈々子はぱっと目をあげて相手を見た。相手は奈々子の黒目がちの目を平然と見おろしている。

「わたし、この本、欲しかったの！」値段シールが貼られた背表紙を相手に見えるように突き出す。「ね？ 安いでしょ！？」

「……ほんとだ……」

それは洋書だった。アルファベットの飾り文字のタイトルがついてるだけの、素っ気ない表紙のその本はほとんど新品だった。前の持ち主はあまり読まずに手放したようだ。背表紙の値段シールは二百円（税別）と印字されている。

「安いから欲しかったのか？」

相手の口調にはからかっているような、笑っているようなニュアンスがあって、奈々子はむっとした。

「ちがいます！ ……取ってくれて、ありがと！」

叩きつけるように言って、一度相手の顔を——片方のくちびるの端をわずかにつり上げ、切れ長の目を細めている——しっかりと見た。というより、にらみつけた。

「……じゃ！」

くるりときびすを返した奈々子の背に声が追いかけてきた。

「おまえさあ」思わず振り返る奈々子に、「その制服で万歳して背伸びするときは、気をつけな。パンツが見えるぞ」

反射的に空いているほうの手でスカートのおしりをおさえる。「うっ、うそ！！」

奈々子の、夏休み明けだというのにほとんど日焼けしていない色白の皮膚がみるみるばら色に染まってくるのをみて、相手はちょっと困った顔をし、いくらか身をかがめ、ひそひそとささやいた。「大丈夫。見てたのはオレだけ……」

奈々子は相手の言うことを最後までできずに、レジに走り、おぼつかない指先でコインを取り出してキャッシュトレーに置き、ビニールのバッグに入れられた本をひったくするように受け取って店を飛び出した。

「おい！」 さっきの声だ。

「ななななんですか！？ ついて来ないでよっ！！」

「ついて来るなってっただって……これ、おまえのだろ？」

相手が差し出しているのは奈々子の通学バッグだ。書架の前で高いところにある本をとろうとして、そういえば、下においたんだっけ、とやっと思い出した。ほら、と差し出された通学バッグを受け取る時に相手の手にふれた。ひやりと冷たい手だった。

その時はじめて、奈々子は彼が同じ学校の、男子用の夏の制服を着ていることに気がついた。

2・あの人、だれ？

用事がすむと相手はさっさと背を向けて行ってしまい、礼をいう間もなかった。

夕方といってもセミの鳴き声が暑苦しい。路上を行き交う人はみな、服に汗を滲ませ、不機嫌そうな表情を浮かべている。

奈々子はバスを待つ間、買ったばかりの本をバス停横の木陰で開いてぱらぱらとめくってみた。さっきの高校生の声、一言一句がなぜか耳元で反復されて目にはなにも映らない。

あのBook Off は、気にいっていた。学校の近所にも似たような本屋が一軒あるのだが、バス停ふたつぶんはなれたところにあるこちらの店の品揃えが奈々子の好みに合っていた。

学校から離れている分、今まで知り合いに会うことはめったになかったのに……。

(ほんとに、みえちゃったのかしら……)

バッグのストラップを肩にかけ、なんとなく、スカートのプリーツを指で整えて押さえる。バスがやってくるのが見えて、奈々子は木陰から出た。

あぶるような西日にあたると、頬がかあっと熱くなった。

* * * * *

「ねえ……、あの人、だれ？ あの真ん中の人……」

月曜日の放課後、奈々子が情報通の友人、満喜の手をつかまえてたずねている。

「え〜、どれどれ？ ……あ〜あそこの？ ……えへへ、奈々子、なかなかめざといじゃ〜ん。この、おくてむすめ！」満喜はぽっちゃりした腕をまげ、ひじでつついてくる。

「そんなんじゃないってば！ どんな人か知ってるの？ 満喜ちゃん」

「お〜、知ってる知ってる！ 桧山って行ってさ、ほら、生徒会のナントカ役員やってる、三年の桧山正弘って……」

「え〜っ、あんな人、生徒会にいたっけ！？」別の友人が横から割り込んでくる。

「おい！ 話は最後まできいてよね！ その桧山正弘っておっさんみたいなふけ顔のやつさ、兄貴が、あの人！」どうよ！ と満喜は自慢げに言い放った。

「え……なあに？ 兄貴って、どういうこと？ 留年かなにかしてるの？」

満喜は待ってましたとばかり、どん、と豊かな胸をたたいた。「あたしのいとこのともだちが桧山兄弟とおんなじ中学でさ、くわしいんだ、あたし。あのかっこいい兄貴のほうかねえ、もらわれっ子なんだって」

「もらわれっ子……って、じゃあ、養子……？」

「うん。ちっちゃい時に親がふたりとも死んじゃったらしいよ。それで正弘の親が引き取ったんだってよ」

「ふうん……。だから同い年の兄弟ってわけ？」

「そ！ だからぜんぜん似てないんだ、あの兄弟」

「名前、なんていうの？ お兄さんのほう」

「ケン。健康の健て字」

「ひやま けん、ね……」

「あんな人、おんなじ学校にいたんだあ。いいねいいねえ、目の保養！」

「文枝ちゃん、あなた、そりゃ遠目だから。彼、そばで見るとおめめがきつくってこわいんだよ。あの目でにらまれたらあたし、ちびっちゃんいそ〜」

きゃははっ、と文枝が細い体をのけぞらせる。「も、やあだあ！ まきちゃんてばあ

……！！」

「カッコはめちゃくちゃいいんだけどさー、あんた、バカ？ って目でみられると、まじへこむんだよねー」「わかるわかる」と、満喜と文枝は奈々子をほったらかして盛り上がりはじめた。

ふたりの会話をなんとなく聞いていた奈々子だったが、誰かの視線を感じて頭をめぐらした。

桧山 健が見ている。

彼が立っているのは昇降口と校舎をつなぐ渡り廊下で、奈々子たちが立ち話をしている校門のあたりとは百メートルも離れている。でも桧山が見ているのは、わたしだ、と奈々子にははっきりわかった。

(なんて強い視線……！)

目の前を大柄な男子生徒が横切り、あっと目をしばたたいている間に、桧山の姿は消えていた。

3・見えちゃったものはしょうがないだろ

満喜と文枝の話題はいつのまにか明日提出する宿題のことに変わっていた。

「え〜っ！ そんな宿題、出たん！？」

「なにいつてんのお！？ 休み明けの授業でせんせー、言ってたじゃん、期限は七日だって。ねえ！」、と、満喜が奈々子に話をふってくる。

「うん。あしたよ。それ」

「うそ～、まじいよ、あのせんせー、提出物にキビシイし。……教科書とノート、教室の机の中だ……」

「とっとと取りに行ってきたよ！ 待っててやるからさ！」

「うん！ 行ってくる！ あ、これちょっと持ってて！！」

奈々子にバッグを押し付け、文枝はばたばたと昇降口へ走っていく。

「あ～あ。このクソ暑いのにご苦労なことで！ ——あ、やっちゃん！ 久しぶり！ ねえねえ！ あのあと、あたしってばさあ、アイス食いすぎてハラこわしちやってもお、たあいへん……」

満喜が通りかかった友だちを呼び止めている。

「奈々子、ごめん！ あたし、彼女と話があるから……またあしたね！」

「え、ちょっと」

満喜の話題はもうアイスクリームを食べ過ぎてひどい目にあったことに移っていた。

(なによお！ 待ってるって言い出したの、だれなのよお！)

奈々子は思いっきり、頬をふくらませた。

* * * * *

校門付近の木陰はどこも立ち話に夢中の生徒たちで埋まっている。ひとり炎天下に取り残されてしまった奈々子は文枝のバッグをかかえたまま、じりじりしながら待った。

通りすがりにわざわざ振り返って奈々子の顔を覗きこんでいくのは男子生徒ばかりではなく、女子の示す関心もあからさまだった。奈々子は人が集まる場所では必ず人の

目を惹く。前後左右どこから見ても申し分のない、可憐な外見に恵まれていたのだ。不機嫌な顔をしていても奈々子はとびきりの美少女だった。しかしとびきりの美少女でも機嫌の悪いときは悪い。

(もお！ ……いつまで待たせるつもり！？ 人に重い荷物押しつけてっ！！ 来たら叩きつけてやろうかしらっ！！)

向こうから文枝がまっすぐ走ってきた。なにやらにこにここと楽しそうだ。その笑顔で奈々子の不機嫌が消えかけた。

「ごめんごめんごめ〜ん！ あたしさあ、よーこちゃんちで宿題いっしょにやることにしたんだ！ ……あれれ、奈々子ひとり？ 満喜ちゃんは？」

「先に帰っちゃったわっ！！ ……なによっ……」

どこからともなく手が伸びてきて、奈々子が振り上げた文枝のバッグをつかんでひょいと取り上げた。「待ちくたびれた。ほら、返す」

「あ、ども」文枝は間のぬけた返事をした。

「帰るぞ」桧山の言葉に奈々子はずいずいしてしまった。口をあぐりと開けている文枝を残して、桧山と奈々子は校門を出て行った。

* * * * *

「……またどこかで見てたのね！？」

「ああ。うしろからな。おまえのおしりが忘れられなくて」

「へ、へんなこと、言わないでください！！」

「見えちゃったものはしょうがないだろ」

「……」

桧山は、とっさに言い返せず表情だけが微妙に変わる奈々子の顔を面白そうにながめていた。

「おまえ……不機嫌な時とか怒ってる時とか、顔にはっきり出るヤツだな」

「だれだって出ます！！」

「ほかの女の子がやってるとみっともなくて見られたもんじゃないけど、おまえだと絵になるよ」

「……………」

「オレ、そこへ寄ってくから」急にそう言って桧山は立ち止まった。大通りを左に折れる角に、その先に町立図書館があることを示す小さな案内板が控えめに立っていた。

「あれ。こんなところに……知らなかったわ」

「春先から工事やってて、夏休み中に開館したんだ。一年生は知らないだろうな」

「あの、わたしも、行っていい？」

「……公共のものだから、好きにどうぞ」

真新しい図書館は本も人も少なかった。桧山は閲覧コーナーのテーブルにノートと持参の問題集をひろげている。そそられるほどの本もない、とわかって、奈々子も自分の宿題を取り出した。ふたりはテーブルの対角、端と端にすわってそれぞれの時間をすごした。

* * * * *

「いつもあそこで勉強してるの？」

「まあね。開館初日に行ってみたら意外と空いててさ、冷房きいててウチにいるより、居心地がいいもんだから……」

「わたしもあそこで宿題やろうかな……いいでしょ？」

「だから、公共の図書館なんだから誰が使ってもいいんだって」

「え〜と、その、桧山さん……は迷惑じゃないですか？」

桧山さん、と呼ばれて彼はちらっと奈々子を見た。そしてぶっきらぼうに言った。

「べつに」

ならんで歩きながら、奈々子は、やったあ！ と小さく、うれしそうに歓声をあげた。

4・誰に何を聞いたのか知らないけど

学校ではほとんど顔をあわせることがなかったし、たまに廊下ですれちがっても互いに話すことがらもなかった。文枝から先ごろの放課後のできごとを聞いていた満喜は、そんな奈々子の様子をうかがっていたが奈々子があまりに反応を見せないのどうとう辛抱たまらず、廊下の隅に追い詰めた。

「ねえねえねえねえ、ねえ！ どうなったのよ、そのあと！」

「な、なんのこと！？」

「だっからさあ！ こないだ、いっしょに帰ったんでしょ？ 桧山と！」

「ああ、あのあとのこと……」

「そうそうそうそう、そう！ そのあとのことよ！」

期待と好奇心ではちきれそうな満喜の丸い顔が近づいてくる。「ああっ！！ ちょっと待って！！ その前に馴れ初めを述べなさい！！」

「馴れ初め？ え〜と、本屋さんで高いところの本、取ってもらったの。それだけよ」

パンツをみられた間柄だ、などといえどどんな尾ひれのついた話が放流されるかわかったものではなかったの、馴れ初めはきわめてコンパクトにまとめられた。

「大通りのバス停の奥の方に、図書館あるの、知ってる？」

「知らないよ、そんなの」

「あの人、そこへ寄ってくって言うから、わたしもついてったの」

「つ、ついてった……そ、それで……!？」

「う……ん、本が少なくてつまんなかった」

「なにそれ。桧山はどうだったのよ？」

「ずっと勉強してたわ」

「……あんたたち、何しに行ったの？」

「何って……図書館にほかに何しに行くの？」

「あ〜だめだこりゃ。信じらんない」

予鈴が鳴っている。

「いけねー！ 次、数学！ 行くよ、ほら！ まったく、世話の焼ける子なんだからっ！」

奈々子は時間を作っては図書館へ行った。

宿題と読書以外なにをするでもなかったが、そこはとても落ち着ける場所だった。そこで一時間過ごすこともあったし、十分のこともあった。桧山はたいてい閲覧コーナーの同じ場所において顔もあげなかったが、奈々子の帰りのバスの時間には、時を前後して席を立ち、大通りのバス停がみえるあたりまでいっしょに歩いた。

奈々子が尋ねると彼は、学校から徒歩でそう遠くないところに住んでいる、というようなことを言った。

* * * * *

公園の歩道に沿ってコスモスが咲き乱れている。

お彼岸なんですよねぇ……と、奈々子がつぶやく。秋分の日で休校だったのだが、ひまをもてあましてなんとなく来てみた奈々子だった。桧山は帰るところだった。

「もう帰っちゃうの？」

「ああ、なんだかのらなくて……。こんな天気の良い日に中にいるのもなんだしな」

図書館の入り口で奈々子はUターンした。

こいつは何しにここまで来たのか、と桧山は思ったが、すっきりと澄んだ九月の日差しの中を美少女と散歩するのもわるくないかな、と考え直す。

図書館は町立公園の一画にある建物の一部を改装して作られたもので、以前はなにか別の施設だったらしい。

「改装されたことを知ってるやつは知ってるけど、知らないやつは知らないんだ。役所にはそういうことPRするっていう発想がないんだよな」と桧山は言った。

「オレはおやじから聞いたんだ」

「お父さん？」

「町役場に勤めてる」

奈々子の口から必要以上に頓狂な声が出た。

「桧山さんのお父さんて、公務員なんですか！？」

「……そんなにおどろくことかね？」

生徒会行事のたびに冴えない姿を全校生徒の前にさらしている正弘副会長とは、みるからに対照的だと友人の満喜が言っていたが、その観察は当たっている、と奈々子は思う。

正弘は姿こそ冴えないが話術には長けていて、退屈な生徒会行事も彼が進行役なら参加してやってもいいか、という隠れファンが少なからずいるのだった。

だが、長身と切れ長のきつい目を持ったこの兄のほうは、他人を寄せ付けない、非日常的ななにかを漂わせていた。口を開くと、それほどむずかしい人じゃない、という印象もまたあるのだが、それは彼の柔らかな甘い声のせいだ。そんな彼の父親が田舎の町役場勤めというのは、奈々子にはなんだかぴんとこなかった。

奈々子のげげんな顔をちらっとみて桧山は言った。

「オレは、親とは似てないからな」

「あ、あの……そんなつもりじゃ……」

「おまえ、オレのこと、何か知ってるんだろ？」

「え……わたしはなにも」

「知ってる、って顔に書いてあるぞ。そ。オレは親とも弟とも血がつながってない。同じ学年に似てない兄と弟がいるっていうんで、面白がってわざわざ言いにくるやつがいるんだ、母親か父親が違うから似てないんだろうって」

彼にしては長いセンテンスを一息に言い切った。

「……ひどいこと、言うのね……」

「なんとでも言えばいい。言いたいやつには言わせておくさ」

「でも！ 違うって、はっきり言ってやらなくちゃ……！」

桧山は少しの間、奈々子に目を留めていた。

「誰に何を聞いたのか知らないけど」

奈々子は、あっ、となった。そうだった。桧山は今の今まで自分のことを話したことはなかった……。思わず指先で口を押さえようとする奈々子から桧山は目をそらして言った。

「……人には関係ないことだから」

さわやかな初秋の散歩はなんとなく気まずいものになってしまった。

5・私が家までおぶってさしあげましょう！

その日。奈々子が掃除当番の仕事を終えたころには校舎に残っている生徒の姿はまばらになっていた。

ほとんど人影のいない昇降口で三年生が数人集まってなにやら話し込んでいる。会話にでてくる言葉の端々からすると、来週末に行われる模試の情報交換をやっているようだ。その中に桧山兄弟がいた。

背の低い正弘の肩越しに桧山 健が目だけで笑いかけてきたので、奈々子はびっくりして気をとられ、すぐ目の前で靴をはきかえている同級生の男子にけつまづいた。

きゃああ！ という悲鳴と、どたどたと床に倒れこむ物音に、正弘が誰よりも早く、すわ！ と振り返る。

「おじょうさん！！！」

「え」

わきばらを思い切り蹴とばされてうめいている男子生徒を押しつけた正弘の両手は、ころんだ美少女に優雅に差しのべられた。

「おけがはありませんか！？」

「お、おけが！？」

「骨が折れてはいませんか！？」

「ほ、ほね！？」

「ああっ！！ うかつに動いてはなりません！！」

「だ、だいじょうぶですけど……」

「そうはイカの……もとい、まいりません！ 万が一のときのため、私が家までおぶつてさしあげましょう！！！」

正弘は常日頃からの的確な言い回し、かつ、迅速な行動、および磨きぬかれた美意識を誇っており、それは昨年の生徒会役員選挙の折にはいかんなく発揮され、副会長のイスを手に入れることでそのレベルの高さを在校生たちに印象づけたのだった。

しかし新入りの一年生には、そんなことはほとんど知られていなかった。

——奈々子にとって桧山正弘は、ただの、ヘンなひと、だった。

閲覧コーナーのいつもの席のイスをらんぼうに引いてどきっとすわりこんだ奈々子は相当むくれていた。図書館職員が咳払いをしている。桧山は顔をあげ、小声でしれっと聞いた。

「……桧山君に送ってもらったんじゃないのか？」

「知りません！！」

テーブルの対角からまじまじと見られて、奈々子はきつとにらみ返した。

「なんですか!？」

「いや。かわいいなあと思って」

なにを言うにも桧山はあまり表情をかえない。今もそうだ。奈々子は面食らって言い返す言葉もなかった。背筋をのばしてふいとそっぽを向く。

宿題を並べてみたものの。どうにもやる気が起こらない奈々子だった。開いたノートの隅に鉛筆でくるくると落書きをしてみたり。窓の外を眺めたり。そのうち、ふいっと手洗いに立つ。

手洗いから戻ってみると……なんだかノートの位置が変わっているではないか。

「なっ!! 勝手に見ないでください!!」小声で桧山に抗議する。彼がノートを手前に引っ張って見ていたのだ。

「見られたくないものだったら、閉じていけよ」相手も小声で言い返してくる。

なんと言い返そうか、目をつり上げて思案している奈々子におかまいなく、桧山は自分のシャープペンでノートの隅の落書きを指した。「おもしろいな」、と。無表情に。

「なにこれ。ヤモリ？」

さりげなく聞かれて、奈々子は釣りこまれてしまった。「ううん、イモリよ」

「ちがうのか？」

「うん、ちがうわ。これはイモリよ。おかあさんの実家の裏庭にきれいなわき水があって、イモリがたくさん棲み着いてるの」

小さいころから見慣れているから間違いない、と奈々子は真剣に言い張った。これはイモリだ、と。桧山は「へええ」と感心して耳を傾けながら、笑いの衝動がこみ上げてくるのを抑えられない。奈々子の落書きイモリは両手足を突っ張り、口から舌を出し、

目を×しるしにしていたからだ。つまり——昇天しているように見えた。

「——なにがおかしいの？」

「いや——べつに——」べつに、と言いながら彼は声を押殺して笑っていた。おかしかった。奈々子にはわるいが、おかしくてたまらなかった。

奈々子はそんな桧山を無然と眺める。

* * * * *

ふと外を見ると、窓に雨粒があたって筋を引いている。公園で遊んでいた子供たちが引き上げ始めていた。雨はみるみる強くなり、公園はあっという間にひと気がなくなった。

「どうしよう……傘、学校においてきちゃった……」

6・寒いのは好きなんだ。目がさめるからな！

「おまえ、うちどこ？」

「松坂町」

「わりと近くだな。送ってやる」

「え。でも。桧山さんここへ来たばかりじゃ……」

「いいから、行くぞ、ほら」

促されて奈々子はいっしょに席を立った。図書館のエントランスで桧山がバッグから折り畳み傘とウィンドブレーカーをひっぱりだすのを、奈々子は感心してながめていた。

「準備いいのね……」

「おまえ、天気予報ってやつ、見ないのか？ 今日午後から雨で気温がさがると言ってたぞ」ウィンドブレーカーを奈々子に差し出す。

「……わたしに？」

「おまえのうちまで貸してやる」

「……うちまで送ってくれるの？」

「傘が一本しかないんだよ！ 早く着ろよ！」

ウィンドブレーカーは奈々子が着ると、かわいいレインコートになった。

まだ四時をまわったところなのに、雨雲のせいで外は暗く、吐き出す息がわずかに白い。動き出しかけたバスが、手を振って合図する奈々子に気がついてすぐに止まってくれた。先に乗り込んだ奈々子が運転手ににっこりと笑いかける。

「すみません。ありがとう」

美少女に笑顔を向けられて初老の運転手の目元がほころぶ。

「いいよいいよ。奥へつめておくれ」

奈々子はほっとため息をついた。

(……よかった、乗りそこなうとこだったわ……)

大き目のウィンドブレーカーは暖く、わけもなくしあわせな奈々子だった。

急に降りだした雨のせいでバスは込んでいた。落ち着いてくると人いきれでかえって蒸し暑い。奈々子はぼうっとしていて、肩をたたかれてはっとした。

「どこで降りるんだよ？」

「松坂町一丁目……あ、次だわ……」

バス内の生暖かい空気から一転して、外は強い雨で肌寒かった。

冷たい雨の降るモノクロの道を、ふたりは黙って歩いた。

……雨の中、ひとりで知らない町を歩くなんて真っ平だけど……

と、桧山はそっと考えていた。

彼が桧山家に引き取られてきたのも、季節の変わり目の雨が降り続く、こんな肌寒い日だった。

……誰かといっしょならば、暖かいのか……

「あの、帰り道、わかりますか？」

「ああ、平気。ちゃんとチェックしてる」

「……そこのうちです」

住宅地の一角、こじんまりした家は真っ暗だった。表札は「西ノ宮」となっている。

「だれもいないのか？」

「うちのおとうさん、単身赴任してるの。おかあさん、今日はお出かけするって言った……」

「……そうか、じゃ、ここでいい？」

「はい。あ、これ、返さなきゃ……」

玄関先のポーチで奈々子はウィンドブレーカーを脱いだ。肌寒さに思わずぶるっと身震いする。桧山は夏服一枚で冷たい雨の中をいっしょに歩いてくれたのだ……

「桧山さん、カゼひいちゃうわ！ ちょっと寄っていきませんか！？ うちで温まって……！！」

「え」と桧山はきつい切れ長の目を丸くした。

「……いや。遠慮する。誰もいないんだろ？」

「ええ、でも、桧山さん、カゼひいちゃうわ！」

「こんな雨、平気だって！ それにオレ、寒いのは好きなんだ。目がさめるからな！……おまえこそカゼひくなよ！」

桧山はひと息にそういうと、ウィンドブレーカーをつかんで立ち去ろうとして、あっ、と立ち止った。

「おかあさん！？」

「あらまあ。すごい雨ねえ、びしょ濡れだわ。奈々子のお友だち？」

「そうなの、帰り道で雨にあっちゃって、送ってもらったの」

桧山はそこでまた、奈々子に面ざしのよく似た彼女の母親に引きとめられた。が、逃げるように雨の中へ飛び出して行った。

その夜、奈々子は熱を出して翌三日間、学校を休むはめになった。
(桧山さんをあんな寒い目にあわせて送ってもらったのに……情けないったらありやしないわ……)

熱の不快感だるさにうめきながら、奈々子はそればかり気にしていた。
(……帰り道、迷わなかったかな……カゼひかなかったかな……今度の週末、模試だって言ってなかったっけ……)

7・見ちゃったんだ……

正弘が浮かない顔をしている。ため息までついて。

「オレの部屋でため息つくの、やめてくれ」健は邪険に追い払おうとする。

「ああごめん」と正弘はあっさりと素直に謝った。「ねえねえ、健兄」

「……なんだ」

「健兄、恋をしたこと、ある？」

健は思わず弟のつやつやと丸っこい、しかし今は物思わしげに沈んでいる顔を見た。

「……いや」

「そうかあ……さすがの健兄も、そういう経験はないのかあ……いや、まいったなあ

……」

正弘はまたも、深々とつらそうにため息をついた。これはもう、話を聴いてほしいサイン以外の、なにものでもない。健がノートから顔をあげて横目で弟を見ると、向こうも横目で兄の様子をうかがっているところだった。

健はついにシャープペンを置き、回転いすを回して弟に向き直った。「なんなんだよ。言ってみろよ」

「うん……あのねえ……」

夏休みの自由課題に読書感想文というのがあった。夏休み明けに提出されたそれらはいったん、学校内の選考を経て、コンクールに出される。その原稿の整理を正弘たち文芸部員が手伝ったのだ、という。

「そのときにさあ、見ちゃったんだ……」

「……なにを？」

「奈々子ちゃんの書いたやつを」

「———」

「あ、健兄は知らないか。こないだ帰り際に、昇降口でコケてた一年生の女の子がいたろ？ あの子が奈々子ちゃんていうんだ。西ノ宮奈々子ちゃん。一部の生徒の間で、一年生にすごいかわいい子がいるって話題になってたんだ。原稿めくってるうちにその名前が目に入ったんで、こっそり、読んじゃったんだ。国語の先生、席はずしてて、文芸部員だけだったもんだからさ。

『赤毛のアン』についての感想だった。

働き手としての男の子が欲しかった初老の兄妹。なのに、孤児院からやって来たのは女の子だ。夕暮れ時の駅でぽつねんと迎えが来るのを待っている彼女。赤毛で、痩せて

日焼けして、服装も持ち物もみすぼらしい。けれども、彼女の目も心も、夢と希望に輝いていた。人というものが苦手な、何十年もの間、自分の農場と家畜を相手に生きてきたマシューは、怖気ながらも、家に連れて帰る道中でアンを気に入ってしまうんだ。孤児院から来たアンはお世辞にも幸せに育ったとはいえない。それにもかかわらず、彼女の発する言葉は美しく、彼女の心根はまっすぐだった。それがマシューの心をとらえたんだ……」

健はいったん置いたシャープペンを取り上げた。何かを書くでもなく、じっとシャープペンに目を当てている。

「登場人物は多いし、5、6年にわたる話で、とにかく、読みどころ満載なんだよ、だから、感想文書こうとするなら、どこに焦点をあわせるかってえのがキモなんだ」

ふっと正弘は息をつく。

「奈々子ちゃんのはね、アンという少女について、アンの人物像、アンへの共感、疑問、アンへの想いが、五枚の原稿用紙に書き込まれていた。端正で優しい文字づかい、やわらかい字の形。ああ……」

正弘は感極って両手で頭を抱えた。

「おまえ、原稿に惚れたのか？」

「健兄！ いいかい？ 字を書き連ねた原稿というものは、正直だ。筆者の人となりが見え隠しもなく表れるものなんだ！ 西ノ宮奈々子ちゃんが書いた読書感想文は、僕の心をしっかりとつかんでしまった！ 一目ぼれならぬ、ひと読み惚れだ！！ そして

ね！　いったいどんな子だろう、話してみたいと思ったあの日の放課後！　昇降口ですっ転んでいたのが西ノ宮奈々子ちゃんその人だったのだ！！」

8・おまえ、本気か？

「志望校絞り込んでこんな時期に。こんな気持ちになるなんて……！」

天ならぬ天井を仰ぎ、「健兄！　僕はいったいどうしたらいい？　この数日間、なんにも手がつけられない。ご飯ものどを通らないんだ。ほら、こんなにげっそり痩せちゃった」

真剣そのものの顔で、正弘は両手でふくよかな頬をすうっとさすってみせた。

「正弘……おまえ、本気か？」

「……どうやら……けど、こんなぶさいくなやつ、奈々子ちゃんはきっと相手にしない……いや……奈々子ちゃんにはもっとかっこいい男が似合う……僕じゃあまるで釣り合わない……ああ、どうしたらいいんだ、こんなんじゃ、受験どころじゃないよおお……」

桧山家は健のほかに、上から正明、正信、正弘という、年子の男子が三人いる。彼らが次々と大学へ進学するので学費のために両親は共働きで、母親もフルタイムで働いている。それで健は高校生になってから家事全般を引き受けた。掃除、洗濯、炊事はすでにお手の物の領域、朝晩の家族の食事のほかに、勤め人の両親の昼食用お弁当まで作っているのだ。

正明と正信はそれぞれ家を離れてしまったので夕食は両親と正弘と健の四人だけだ。それでも、残業だの付き合いだなので親がいないときがある。今夜はまさにそれで、正弘とふたりだけの夕食。

食事ものどを通らないというから、じゃあ作るのやめて、親のお弁当のおかずの残り
でつつましくすまそうかと独り言をいうと、「え……」と正弘がすぎるような目をす
る。

「食べられないんだろ？」

「うん。ご飯は。でも、うどんなら……あ、ごぼうのかき揚げもほしいな……」

「……………」

* * * * *

「おいしい！ おいしすぎるよ！ うどんのこしといい、つゆの塩加減といい、このご
ぼうのかき揚げがまたさくさくっと——！ なんておいしいんだ！ 芸術だよこれ
は！！」

「そうか？」

「僕、結婚するなら健兄みたいな人と」

「やめろ。気色わるい」

「あれ？ 健兄？ それなに？ まさか、カツ丼……」

「ああ。今朝、弁当用に豚カツ作ったんだ。その残りを玉ねぎと煮て卵でとじた。……
おまえ、ご飯ものは食べられないんだろ？」

「……ごくり。ねえ、交換しない？ あ、ごめん、冗談だって。にらまないで」

「おまえなあ、本当に悩んでるのか？」

「悩んでるよお！ 悩んでるからわざと明るくふるまって、行いの端々でウケを狙って
るんじゃないか！」

「ほら、豚カツ一切れやる。オレ、ちょっと思ったんだが。正弘、その西ノ宮って子、
文芸部に誘って見たらどうだ？」

9・こんな気持ちは生まれて初めてだよ

奈々子は町立図書館に姿を見せなくなった。かわりに、正弘の食欲がいや増し、奈々子の話題が増えた。とてもわかりやすい図ではあった。

「いろいろ考えてさ、来年度の部長候補の中川さんに勧誘してもらったんだ。読書感想文整理手伝いのとき、一緒だったしね、彼女も奈々子ちゃんの前稿に感心してたクチなんだ。そうやって、おんなじ女子に声かけられた方が入りやすいだろうと思って。そしたらありがたいことに、このふたり、気が合うみたいなんだ。秋の文化祭に小説の作品集出すことになってるんで、その打ち合わせで毎日盛り上がってるよ」

いかにもわくわくした表情で正弘は言う。

「僕？ 僕は遠くから眺めてるだけだよ。いきいきしている彼女を眺めてるだけで十分幸せさ。ああ、こんな気持ちは生まれて初めてだよ、ねえ健兄、健兄が文芸部に誘って見たらって言ってくれたおかげだよ、あのアドバイスがなかったら僕はずっともんとしてただろう」

「彼女の『赤毛のアン』の感想文はほかのいくつかと一緒にコンクールに出品された。結果がわかるのは年明けだったかな、もしかしたら、いいところまでいくんじゃないかって、国語の安西先生も言ってた。先生もうんと褒めてたよ。そしたら彼女、日記は毎日書いてるけど、文章書いてこんなに褒められたのは初めてだって言うんだ。結果はどうあれ、すごくうれしい、って。読書感想文てのも書いてみるもんだよねえ！」

金木犀の花がほのかに香る町立公園のベンチで、健は正弘たち文芸部が作った作品集

をめくった。詩、俳句、短歌、さまざまな長さの小説、好きな文学作品についての研究、なんかも載っている。

筆者はみなペンネームを使っていて、仲間内ならばどれが誰の作とわかるのだろうが、部外者には文章から筆者の顔までは思い浮かばない。それでもばらばらとめくるうち、吸い寄せられるようにあるページに目が留まり、手が止まった。

それは『秋』をテーマにしたリレー小説で、何人かの書き手が前の話を受けて展開させ、後者に渡す、というものだった。その中の一遍。

冷たい雨が降りしきる九月の薄暗い夕方。足元で雨がはねる道をふたつの傘が並んで歩いて行く。語り合う言葉もなく、どこまでも並んで歩いて行く――

mitsuha、というペンネームも、その前後がどういう話なのかも、健にはどうでもよかった。

あの夕暮れのひとこまが奈々子の心の中に焼き付いてはいるらしい。ひとつの傘の中で健が感じていたのは冷たい雨よりも、むしろ奈々子の体温だった。だが、彼は玄関先で引きとめる奈々子を振り切るようにして雨の中へ飛び出した。奈々子にはそれが平行線に思えたのかもしれない。そして、彼女自身をもっと輝ける世界を選んだのだろう。(そう仕向けたのは、ほかでもない。オレだ)

ぱたり、と彼は作品集を閉じて脇に置いた。公園のふちに沿って、若いケヤキが紅く色づき、夕陽に華やかに燃えている。世界中が橙と金に光り、輝き、やわらかい風が金木犀の芳香を運ぶ。きつい目を細めて彼はその中に身を置き、まぶしい、と思う。

パフ……と、彼の口をついてこぼれ出る。

(西ノ宮奈々子は小さな男の子じゃないし、オレは永遠に生きる魔法の竜じゃないけど……)

いっしょに遊んだ小さな男の子は新しい世界をみつけ、それきり竜のもとへやって来なかったというその歌を、そっと、口ずさんでみたかった。

10・類は友を呼ぶっていうやつかな

文化祭が終わり、正弘も文芸部を引退し、真剣に受験勉強に没頭し始めた。正弘は人文系を志望し、かたや健は理系を志望していた。得意分野はまったく違うが、なぜか女の子の趣味はいっしょだったのか、と健はぼんやりと考える。

しかし、趣味がいっしょというより、西ノ宮奈々子は不思議とひとを引きつけるようだった。

前後左右どこからみても愛らしい容顔や、高く澄んだ声音は、もしかしたら同性たちのやっかみを買っていたかもしれないが、おそらくそれ以上の人目を引いていたし、文化祭以降、文芸部に入部希望者が増えたという。

「うざい三年生が引退してせいせいしたせいだと思うよ」と、正弘は自嘲げみに言いつつ、奈々子の存在と無関係ではないだろうとも分析するのだ。

「彼女は物事を的確に文章にする力があるし、読む力もある。創作意欲以前に、そういう現実的な力があるんだ。僕なんか単に面白おかしい漫才みたいな話を書きとぼしたっていう、不埒な部員だったけどさ、中川さんみたいにちゃんとしたものを書いたり読んだりしたい人にはつまらない部だったんだな。そこへ奈々子ちゃんがやって来て、中川さんもがぜん勇気づけられたっていうんだ。今、集まって来てる入部希望者は、ふしぎなことにみんなそういうタイプらしいんだ。類は友を呼ぶっていうやつかな。まあ、文芸部ってえと、おたくのあつまりだっけ認識してる人が多いからね、僕みたいなのがいると当たらずとも遠からじだし」

「そうそう。夏休み読書感想文コンクール、奈々子ちゃんのが市町村審査を通過して県審査へ上がったんだってよ。今日、安西先生から聞いた。ほんとに全国審査まで行っ

ちやうかもしれない。うちの学校からは過去にふたりほど全国へ行ってるそうだけど、行った、ってだけで。やっぱり全国ってくらいでレベルは高いだろうからねえ……それにしても、楽しみだなあ」

健に無言でにらまれた正弘はすごすごと部屋を出ていく。彼らは子どものころからずっとふたりで一部屋を使っていたが、上の兄たちの部屋が空いてからは、ひとり一部屋である。それでも正弘はひんばんに健の部屋を訪れる。末っ子で甘えん坊の正弘にはどうしても話し相手が必要なのだった。

健も迷惑というわけではない。けれども、西ノ宮奈々子の話を聞きたいとは思わなかった。彼がその話題に興味を示さないでいると、正弘の方も次第に話さなくなり、桧山家からは西ノ宮奈々子の名は消えていった。

冬が来て、年も押しつまり、高校三年生の彼らには、受験の試練が待っていた。

11・ほんの一時に見せる気まぐれな美

このころ、奈々子が何を考えていたか、正弘も健も、知るよしもない。そもそも年が明ければ三年生は受験一色、一、二年生からすれば三年生などもはやいないも同然である。

読書感想文コンクールの結果を待ち、文芸部で刺激的な仲間たちを得、チャコールグレーのダッフルコートの際元に赤いマフラーをのぞかせて、はにかんだ笑みをうかべる奈々子は、桧山兄弟にはリアルに充実したまぶしい女子高生だった。

真偽のほどはわからないが、彼女が二年生の写真部員とつき合っているという噂もある。学校内でカメラを向けられている奈々子の姿を見かけた者が何人もいるのだった。

「まあ、被写体としての価値は十分あるよ」と正弘は認める。「近くで見ると、ほんとに肌理が細かいんだ。乳色っていうか、バターを溶かしたような、なんともいえない肌の色で、真っ黒な瞳、鼻から桜色の唇にかけての線、顔の輪郭がちょっと幼くて。どことなくアンバランスでそこはかたく神秘的で。子どもから大人に成長するはざまの、ほんの一瞬に見せる気まぐれな美。カメラを向けたくなる気持ちはよくわかる。写真どころか、TVのでかい画面に大写しにしても鑑賞に堪えるよ、彼女は」

健は黙って正弘の奈々子評を聴く。

「けど、それはそれ。彼女が男とつき合うとか、そういうのってちょっと想像できないんだよな……」

奈々子にひと目ぼれして、ご飯ものどを通らずもんもんとした日々を経験してきた正弘である。校舎の廊下を歩いて行くと、通りかかる下級生の女子たちの視線はあらかじめ正弘を素通りし、正弘の頭上の、少し上の方を向いている。しかし視線を浴びている当の本人はきれいさっぱり無視していることだろう。

そこで、正弘はこうつけ加えた。「女の子に興味のない人にはどうでもいい話だろうけどね」

12・あそこで事故があったらしい

一月半ばの試験を終え、厳寒の中、受験生たちはそれぞれの志望校を決めなければならない。ここでも正弘と健は同じ大学の別々の学部を志望していた。

人懐こい正弘は、にこにこしながら「おんなじとこかあ。僕は健兄といっしょなら心強いよ」と言った。正弘の言うことは、いつもその言葉通りである。彼のおしゃべりに

は辟易させられることもあるが、率直で裏表のないところはけっこう好きかもしれないと健は思うのだった。

節分を過ぎ、暦の上では春になった二月上旬の夕方。彼らは連れ立って近所のショッピングセンターへ出かけた。健は晩ご飯の買い出し、正弘は正弘の思惑で。

食料品、衣料品、日用消耗品、生活に必要なものはなんでも揃うといううたい文句のショッピングセンターの中央催事場は、バレンタインデーフェアが華やかに始まっている。そういうのに健は目もくれず食料品売り場へ、正弘は横目で見て、おしゃれなファッション雑貨を並べている店へ向かった。

もうすぐ、奈々子の十六歳の誕生日なのだ。だからといって、バースデープレゼントを、というつもりはなかった。個人的にそんなことをしたら、奈々子はきっと戸惑うだろう。二年生の中川さんには中川個人の意思で奈々子を勧誘するように、言を弄して仕向けた。そのへんには正弘は自信がある。奈々子は自分を文芸部に誘った張本人が誰か、知ることはないのだ。

正弘はただ、かわいい女の子、ひそかに思いを寄せた少女のために、バースデープレゼントを選ぶという、一生に一度巡ってくるかどうかあやしい、稀有なシチュエーションを楽しみたかったのである。

明るい春の色が並ぶ店頭。パステルカラーのクリアファイル、きらめくチャームのついたシャープペンシル、かわいいペンケース、それらを前に、リボンをほどいて目を輝かせる奈々子を想像し、天にも昇るほど幸せな気分ひたる正弘であった。春には遠い、受験真っ最中の文字通り色気にかける正弘にとって、生き返るようなひとときだった。

さんざんウィンドウショッピングを楽しみ、うっとりした面持ちのまま、正弘は健との待ち合わせ場所へ足を運ぶ。健はそんな弟を心配そうに遠くから眺めて、近づいてくるのを待っていた。

「ごめん、健兄、待った？」

「いや」

正弘はそこで、なんだか周囲の雰囲気がおかしいことに気がついた。ざわついてい
る。日常の買い物をする人々の日常のさんざめきとは違う、声にならない不穏なざわめ
き。

「……どうかしたの？　なんかあったの？」

「店を出て右手のほうに、横断歩道がある信号があるだろ。あそこで事故があったらし
い。救急車とパトカーと事故処理車が来てる」

「救急車って……怪我人がいるんだ……」正弘は健が両手に持っていた買い物袋のひと
つを引き受けながら眉をひそめてつぶやいた。

「ああ。高校生がはねられたそうだ」

13・生徒会代表してお葬式に

ショッピングセンター近くの横断歩道で車にはねられた高校生とは西ノ宮奈々子だ、
とわかった瞬間、正弘の手からガラスのコップが滑り落ちて、耳障りな音をたててリビ
ングの床で粉々に砕けた。

受話器から相手の声がなにか言っているのが漏れ聞こえてくる。しかし正弘は一言も
応答することができず、無言のまま受話器を置いた。そしてのろのろとしゃがみこみ、
割れたコップの破片を拾おうとする。震える手で。

「正弘」と健は低く声を張った。どうみても弟は尋常じゃなかった。「正弘！　それは

オレが片つけるからおまえはさわるな！」その辺にあった新聞紙を広げて飛び散ったガラスを注意深く拾い集めながら、彼は尋ねた。「電話、誰から？」

正弘はごくつと唾を呑みこんでかすれた声で言った。「西ノ宮さんが」と。いつもはあつかましく、奈々子ちゃん、と名前と呼んでいる正弘が彼女の姓を口にした。「西ノ宮さん……亡くなった、って」

思わず顔をあげた健は、鋭い痛みを覚えた。割れたガラスの鋭い切っ先が指先を切った。

「昨日の事故……信号無視した車が西ノ宮さんをはねた。体を強く打って……内臓破裂で……即死……」

「……正弘……」

「今の電話……大和くんからで……新しい生徒会長の……生徒会代表してお葬式に……けど、在校生のお葬式なんてどうしていいかわからないってパニックで電話してきた……」

「正弘、大丈夫か。顔が真っ青だ、葬式なら誰か別のやつに——」

「いや——そうもいかないよ、健兄。旧会長と書記は受験で県外行ってるし、それで大和くん僕を頼ってきたんだ。後輩の面倒はちゃんと見てやらなくちゃ。後輩の——お葬式も——西ノ宮——」

宙を見据えたまま淡々とつぶやく弟のとなりに並んで座り、健は血のにじむ指先を見つめた。

14・これからなのに……

読書感想文全国コンクール、優秀賞獲得の知らせを受けた日が、奈々子の命日となった。まだ十五歳だった。

お通夜の夜は、前日までかんかんに凍っていた真冬の空気が暖かい南風でいっきに緩んだ。

「これからなのに……」と、誰もが考え、つぶやいた。

学校始まって以来の読書感想文優秀賞の賞状を受け取らなければならないのに。

長い冬が去って、春がやってくるのに。

まだ、十五歳なのに。

健は茫然としている正弘に付添い、奈々子がいる松坂町の葬儀場を訪れた。奈々子の母親は彼を覚えていたらしく、あ、という表情を見せたが何も言わなかった。健も黙って頭を下げ、焼香した。

通夜には高校の文芸部の面々はじめ、クラスメート、小中学校時代の友達、など、健たちよりも年下の女の子が多く、彼女たちが思いがけない悲報に寄り集まってむせび泣いているのを見るのがいたたまれず、健は早々に辞した。

だいたい、正弘についてきただけの自分は部外者のような気がした。

その正弘は大和生徒会長や、文芸部の中川聡美と一言二言交わすうち、気持が落ち着いてきたのだろう、表情もしっかりしてきて、「知り合いもいるし、ちょっと遅くなるかもしれないけどひとりで大丈夫だから」、というので、それ以上通夜の席にいる理由もなかったのだ。

健は目で奈々子の母親を探した。彼女は会場の向こうの隅で、親を同伴した女子高生と挨拶を交わしていたが、ふっと、健の方を見た。まっすぐ見てきた彼女と目が合ったので、健はちょっと戸惑い、後ずさりしながら丁寧に頭を下げた。

彼女は引きとめようとしたのか、右手を健の方へ伸ばしかけたが、親娘づれの親の方から話しかけられ、手をおろし、健に向って居住まいを正して札をしてきた。

さようなら、と彼はつぶやく。もう会うこともあるまい、と考えている自分にちょっと驚く。妙な気持だ。西ノ宮奈々子の死がショックなのは確かなのだが、心が動かない。感慨がなにひとつ湧いてこない。涙をもよおしさえしない。手を取り合って死を嘆く人たちを見ていたたまれなくはなるが、一緒に泣きたいとは思わないのだ。

自分の思いがけない面を見てしまった気分だった。人でなし、か。彼は唇を片方だけ持ち上げ、自嘲した。

15・中身が、僕は気になるんだけどね

「お通夜の時、中川さんが大きな、マチつきの封筒を持ってきた。学校の部室に置いてあった西ノ宮さんの私物だった」

その晩遅く帰宅した正弘は、そう健に報告した。

「封筒の中は原稿用紙だって。こんなに……」、と、正弘は親指と人差し指で厚さを示した。「こんなにあった。原稿用紙で五百枚とか、七百枚とか、あったんじゃないかな。西ノ宮さん、授業が終わってから毎日部室でこつこつ書いてたそうなんだ。中川さんがいうには、小説じゃないか、って。おかあさんは、娘さんが文芸部に入ったのは知ってたけど、何やってたのかまでは知らないって言ってた。文芸部で新しい友だちが次々とできて、楽しそうだな、くらいに思ってたそうだよ」

淹れてもらったミルクティに砂糖をどっさり入れて、おいしそうに飲んで正弘は報告を続ける。

「西ノ宮さん、文化祭の作品集でリレー小説やって、初めて小説というものを書いたらしい。読書感想文褒められたこともあって、すっかり書く楽しみにはまっちゃったらしいんだ。小説の書き方や表現の仕方について、彼女がいろんな疑問を口にするんで、中川さんたちは調べたり意見を交換したりして対応するのに大忙しだったんだって。まあ、僕たち三年生が引退した後のことだけだね。

だから、西ノ宮さんのおかげで文芸部はかつてないほどモノを書くいろんな方法や技術を発見しました、なんて、中川さん、言ってたよ。

その一方でさ、前からの仲良したちは、文芸部に入ってから奈々子ちゃんは人が変わったみたいに部活に夢中になっちゃって、ちょっと寂しかった、って」

健はミルクティのカップで両手のひらを温めながら、「ふうん……」と相槌を打った。「文芸部入部は、彼女にとって大きな転機だった、ってことか？」

「みたい、だよな。だからさ、彼女が夢中になって毎日毎日ひたすら書いてたっていう、原稿の中身が、僕は気になるんだけどね。ふつう、数ヶ月で原稿用紙五百枚も書けないぜ。なんていうか、こう、よほどのパッションでもないと思えるもんじゃない。でも、書いた本人はもう……この世にいないわけで……親戚の人が、いっしょにお棺に入れて、いっしょに送ってあげたら、って……」

「……そう、か……」

「うん……。残念だけど。仕方ないよ。仕方ない」

「正弘……大丈夫か……？」

「大丈夫、かな。よくわからない。でも僕は——先輩として、後輩の面倒をみて、亡くなった後輩にお別れをしなければならぬ。徹夜して、弔辞の案を考えるよ。大和くん、弔辞なんて見当もつかないっていうから」

ずっと陰から真剣に見守ってきたおまへの弔辞なら、さぞかし、感動的だろう、故人

も喜ぶだろう、というようなことを、なんとなく考えた健だった。

奈々子に関して、同じ『見ちゃった』とはいえ、かたや高校生全国大会レベルの読書感想文、かたや制服の下の下着である。自分の出る幕はひとつもないとわかっている。

彼女の才能を見出し、短いながらも生き生きとした高校生活をもたらした正弘こそ、別れのことばを贈るにふさわしい。それが正弘にとって残酷なことであっても。

「……夜食、作ってやろうか」

「ありがと。健兄」

16・清潔で無機的な白い色の下に

奈々子の告別式の日。春一番が一転して、大雪が降った。

世界中が音もなく白一色に埋もれていく。生々しい事故の衝撃と悲しみがどこまでも清潔で無機的な白い色の下に埋もれていく。降りしきる雪のなかで、なんだか……ふしぎだ、と彼は思う。雪が、去っていく彼女を見送っているような気がする……

咲き乱れる桃色と紫のコスモスの花の向こうで少女が振り向く。振り向いたそのまなざしは、びっくりしたように、はにかんで彼を見る。

「今日は来ないのかなって思いました。先に帰るところでした」

初秋の風のように澄んでやわらかい声は、今も彼の耳に残っている。あれは、夢じゃ

ない。

記憶の上に春の雪が降る。白く。そしてなにもかも、覆い尽くす。

nanako-fifteen

あとがき

けっして……交わることのない道を歩くふたり。

『彼女は必ず十代半ばの年齢で夭逝する』運命にあったひとだった。

この『nanako-fifteen』は、『火の精霊』、『オリカルクムの記憶』から現代へと続くお話です。なので、本当なら『火…』と『オリ…』に続いて読んでいただきたいところなのですが、この二編、手直しの時間がかかりそうなため、いったん下げ、手直し後もほとんど影響はないだろう、『nanako…』を先にUPすることにしました。舞台は現代、短編なので気楽にお手にとっていただければ幸いです。

2020年12月20日 峯村 明

nanako-fifteen

2020年12月 20日初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材「PIXTA」 <https://pixta.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
